「母」

（三浦綾子著　角川文庫）

小林多喜二の母（小林セキ）

小林セキ年譜

1873 年（明治６年）８月 22 日。誕生。秋田県北秋田郡釈迦内村釈迦内。
小作農、木村伊八の長女。
1886 年（明治 19 年）暮。セキ 13 歳。隣村の小林末松に嫁ぐ。末松 21 歳。
1895 年（明治 28 年）セキ 22 歳。11 月 15 日。長男、多喜郎誕生。
1900 年（明治 33 年）セキ 27 歳。長女、チマ誕生。
1903 年（明治 36 年）セキ 30 歳。次男、多喜二誕生。
1907 年（明治 40 年）セキ 34 歳。多喜二、４歳。１月４日。次女ツギ誕生。
10 月５日多喜郎死去。12 歳
12 月下旬。義兄慶義のすすめで、一家は小樽へ移住する。
1908 年（明治 41 年）セキ 35 歳。多喜二、５歳。正月が過ぎてまもなく、
一家は小樽区の南はずれの若竹町に住居を定めた。
1909 年（明治 42 年）セキ 36 歳。多喜二、６歳。12 月 12 日。三男、三吾誕生。
1916 年（大正５年）セキ 43 歳。多喜二、13 歳。４月、多喜二、府立小樽商業学校に入学。
７月７日、三女、幸（ゆき）誕生
1921 年（大正 10 年）セキ 48 歳。多喜二、18 歳。３月 17 日、多喜二、小樽商業学校卒業。
５月５日、多喜二、義兄慶義の援助を受け、小樽高等商業学校へ入学。
1922 年（大正 11 年）セキ 49 歳。多喜二、19 歳。
７月 17 日、長女チマ、泰北銀行に勤めていた朝里の佐藤藤吉と結婚。
1924 年（大正 13 年）セキ 51 歳。多喜二、21 歳。
３月９日、多喜二、小樽高商卒業。
３月 10 日、多喜二、北海道拓殖銀行に勤務。
４月 18 日、多喜二、小樽支店勤務に決まる。
８月２日、夫の末松、脱腸手術後の経過悪く小樽病院で死去。58 歳。
10 月。この頃、多喜二、タミ（仮称）と出会う。
1925 年（大正 14 年）セキ 52 歳。多喜二、23 歳。
３月。多喜二、上京。東京商科大学の試験を受けるが、不合格。
1933 年（昭和８年）セキ 60 歳。多喜二、30 歳。２月 20 日。多喜二、死亡。
1961 年（昭和 36 年）５月 10 日。セキ死去。87 歳。

◆末松「いいか、おセキ、驚くなよ。幸蔵の野郎がヤソになったんだとよ」
ヤソと聞いて、わだしもぶったまげた。
「な、なんだって！？　ヤソになったって？　それはまたごっぺ返したね」
次の言葉がつづかんかった。あんたねえ。これ、明治 34 年頃の話だからね、ヤソと聞いたら、驚くの驚かんの騒ぎじゃない。明治の初めには、ヤソば信じたら、信じた当人はむろんのこと、家族の者まで磔刑になったっちゅう話だからね。ヤソと聞いただけで、みんなぶるぶるおっかながったもんだ。そんな毛唐の神さんなんぞ信じて、ご先祖さまに申し

訳がたつもんだか、ご先祖さまの祟りがないもんだか、わだしは今にも自分たちが、ぐるぐる縄で縛られて、引っぱられて行くような気がして、「ヤソなんて、そったらもんが小林の家から出たなんて、世間さまに恥ずかしくないべか」と、末松つぁんに言ってみた。すると何か考えていた末松つぁんが、わだしの顔を見て言った。
「いや、何も恥ずかしいことはなかべ。どこの神さん信じようと、どこの仏さん信じようと、もはや文明開化の世の中だ。ヤソのご禁制も明治六年で解けたことだし、ま、心配すっことはなかんべ。けどなあ、ヤソになったとはなあ。北海道って、ぶったまげた所だなあ」

◆「昔から禍福はあざなえる縄の如しと言ってな、人生ってもんは、禍いと幸福が交り合っているもんだ。慶義あんつぁまも、不幸つづきばかりと、決めたもんでもあるめえ。人生、雨の日もありゃあ、天気の日もあるべえ」

◆昔々、仁徳天皇っていう情け深い天皇さんがいたんだと。お城の上から眺めたら、かまどの煙が、細々と数えるほどしか上がっていなかったんだと。それで天皇さんは、国民は皆貧乏だと可哀想に思って、税金ば取らんようになったんだと。したらば、何年か経って見たならば、どこの家からも白い煙が盛んに立ち昇っていたんだと。天皇さんは大喜びで、国民が豊かになったのは、わしが豊かになったのと同じことだって、喜んだんだと。

◆どこの親だって、我が子は可愛い。我が子ほど可愛いものはない。命ば代わってやりたいほど可愛いもんだ。子どもに死なれるって、ほんとに身を引きちぎられるように辛いもんだ。まして多喜二のように死なれては、我が身ば八つ裂きにされたような辛さでねえ。しばらくは飯も食いたくなかった。夜も眠られんかった。

◆三浦綾子がこの作品を書くに至った動機と経過。
著者が「母」を書いたのは、夫光世氏の勧めによるものでだった。
しかし、多喜二と共産主義をよく知らなかった著者は困惑を覚えた。
その戸惑う著者に光世氏は「多喜二の母は受洗した人だそうだね」と言った。
その一言が著者の心を動かし、取材を始めたのであるが、資料を調べる過程で、著者の心を捉え、突き動かしたのは、多喜二の家庭が「あまりにも明るく優しさに満ちていたこと」および「多喜二の死の惨めさと、キリストの死の惨めさに、共通の悲しみがある」という思いであった。
「もし多喜二の母が、十字架から取りおろされたキリストの死体を描いた「ピエタ」を見たならば、必ずや大きな共感を抱くにちがいない」と三浦綾子は書いている。
「多喜二の母として、多喜二が属していた共産党という団体を、多喜二を愛するが故に愛していたという立場になら、私も立てるような気がした」と。

多喜二の母は、まだ受洗していなかった。→ 書く気を失ったこともある。
セキの葬儀を執り行ったのは、小樽シオン教会牧師近藤治義氏
セキの好きだった讃美歌「山路越えて」